
僕の世界と、もう1つの可能性

隠れsugar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の世界と、もう1つの可能性

【Nコード】

N2098P

【作者名】

隠れsugar

【あらすじ】

ポケダン赤・青の主人公が人間の世界に帰っていたら…

（前書き）

平仮名のみセリフは、ゲームからそのまま引用したもの。

登場人物

ピカ：主人公（ピカチュウ）

ブイ：パートナー（イーブイ）

ここはどこだろう

ゆめのなか　なのかな？

ピカと　だったら

せかいいちの　きゅうじょたいが　できると
おもうんだよ。　どうかかな？

ボクは……　ピカのこと
しんじてるんだよ？

え？　な　なんで？……
どうして？

せっかく……
ともだちに なれたのに……。

ピカーーーーーー！

……

………

クーラーが効いた部屋で目を覚ます。

午前9時。

大人が、平日に起きる時間ではないかもしれない。
が、自宅警備員ことニートであり、親のすねをかじって生活している僕にとってはそう遅い時間ではない。

「それにしても」

と、誰も聞く人などいないのに声に出してつぶやく。

またあの夢だ。

最近多い気がする。

そんなんに向こうの世界が名残惜しいのだろうか。

僕の選択は間違っていたのだろうか。

分らない。

……

僕は昔、ポケモンの世界に行ったことがあるのだ。

もう今から7年前の話。当時の僕は中学2年生だった。

……

そよ風が気持ちいい。

どこかの草原で眠っていたようだ。

誰かにおこされる。

「あ きがついた！ よかった」

目の前にいたのは犬とも狐とも言えないような小動物。
しかもしゃべっている。

「キミ ここで たおれてたんだよ。

おきてくれて よかったあ。

ぼくは イーブイのブイ。 よろしくね！

……で キミは？

ここらへんじゃ みかけない力オ だけど……」

全く状況が分かず、僕は混乱していた。

「君は？…って、その前に君は何？」

「だから、僕はイーブイのブイだよ。君は…ピカチュウ？」

ピカチュウ、という単語は最近知ったものだった。

半年ほど前の例の事件で「ポケモン」というものが騒がれていて知った。

確か主人公の横にいつもいる奴だ。

黄色い…ネズミ？

「いや、僕は人間だけど…」

「え？にんげんだって？

でもキミ どこから

どうみても ピカチュウだよ？」

そんなことは…と言いかけて、自分の手が目に入る。
…黄色だ。

慌てて体中を見回すが、その通りピカチュウだった。

そもそも、『犬とも狐とも言えないような小動物』がしゃべっている時点でおかしいと思うべきだった。

「なんだ夢か」

しかし、頬をつねると痛い。

「キミ… すこし かわってるね……」。

じゃ なまえは？

なまえは　なんて　いうの？」

「名前…」

言われて考えるが、自分の名前が分からない。

……重症だ。

「えーっと…。ピカ」

ピカチュウだから、という安直な理由だが、僕には他にまともなゼ
ンスの名前を考えつくことができなかった。

「ふーん。

ピカって　いうの。　なんか…

おもしろい　なまえだね！」

苦し紛れに作った名前が気に入られたようでよかった。

そう、ブイとの出会いはこうだった。

今でもまだ一言一句正確に思いだせる。

そして、僕らはポケモンの世界を救う旅に出ることになるのだ。

巨大な隕石を破壊し、世界を救うこと。

それが、僕がポケモンになった理由だった。

それはつまり、世界が救われれば、人間である僕がポケモンの世界にいる意味はなくなるということ……

ずっといたいと思っても、別れのその日は必ずやってくるのだ。

「もうすぐ もとの せかいへ
もどらなければ なりません。
わかれの ときが きたのです」

世界を救うために僕をポケモンにした張本人であるサーナイトの声が聞こえる。

……張本人、とは言っても、僕自身の同意のもとだけだ。

「きたのか…… とうとう このときが……」

僕の体から光があふれ出てくる。

「……！ ピカ！……
その からだ…… どうしちゃったの？」

「ゴメン。 きょうで おわかれなんだ」

「……え？」

…… おわかれって……
「どういうこと？」

「ポケモンでの やくめが おわったんだ。
にんげんの せかいに かえらなくちゃ いけない」

「え？ な なんて？
どうして？」

よく わかんないよ！
わかるるなんて！
せっかく……

ともだちに なれたのに……」

「そうだよ。 ブイとは いつまでも ともだちだ。
ずっと わすれない」

少しずつ体が軽くなって宙に浮かびだす。

「まってよ ピカ……。
ボク ピカが
いなくなったら……」

少しずつ上昇していく体。
もう時間がない。
最後の、言葉。

「ゴメン。 サヨナラだ……」
ブイへの、別れのあいさつ。

「ピカーーーーーー！」

そう、この時も今と同じ夏だった。

そして、僕は今と同じように、クーラーの効いた部屋で、何事もなかったかのように、人間として目を覚めたのだ。

ブイの、叫び声が、耳に残ったまま。

でも、僕は人間だ。

ポケモンの世界で生きていくことはできない。

僕が生きる世界はここなんだ。

……

そんな僕の選択は間違っていたんだろうか？

ポケモンの世界で、救世主として、世界を救った英雄として、何よりブイの隣で、生きていくべきだったんだろうか？

……

いくら自問しても答えは出ない。

ポケモンの世界から帰ってきた中2の僕は、クリスマスプレゼントとして、当時発売されたばかりのゲームボーイカラーと、ポケットモンスター赤を買ってもらった。

そして今、僕は人間の世界にいながらにしてポケモンの世界にいる、
といって過言ではないほど、ポケモンをしている。

もしかしたらこの世界でも、僕にとってブイのような存在たりえる
人はいるかもしれない。
もしかしたらこの世界でも、僕は救世主になれるかもしれない。

けれど、僕は今のこの現状に満足している。

画面を通して、イーブイと―偽りのブイと―接していただけるだけで
満足だ。

これが、僕の世界だ。

俺が知っている彼の話はここまでだ。

だから俺は、この年の11月17日に何が起きたか―あるいは起こらなかったか―を知らない。

ポケモンの世界へ戻っていく救世主を見て、彼が何を思ったのかを知らない。

（後書き）

？小説中の「今」とは西暦何年の事？

：これが分からないと11月17日が何を指しているのか分からないかも。

？「例の事件」とは？

分かる人には分かるけど、パカパカによるあの事件ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2098p/>

僕の世界と、もう1つの可能性

2010年11月29日05時48分発行